



Title	名詞型助数詞の用法：準助数詞「セット」と「組」を中心に
Author(s)	東条, 佳奈
Citation	阪大日本語研究. 2015, 27, p. 109-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51518
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名詞型助数詞の用法
—準助数詞「セット」と「組」を中心に—

The usage of Nominal classifiers: focusing on comparison
of *-setto* and *-kumi*

東条 佳奈
TOJO Kana

キーワード：名詞型助数詞、外来語、準助数詞、類別詞、まとまり性

要旨

日本語では事物を数える際に、助数詞とよばれる接辞を義務的に伴う。現代日本語の助数詞には、「1冊」の「冊」のように数詞と切り離して単独で用いることができないものと、「1票」の「票」のように、名詞と同形であり、数詞と離しても単独で用いることができるものが存在する。本稿では、後者を「名詞型助数詞」とし、個別の助数詞である「セット」を取り上げ、類義の助数詞である「組」と比較しながら、なぜ「セット」という外来語の名詞が助数詞として使われるようになったのかを複数のコーパスの用例から考察し、名詞型助数詞の特徴について分析を行った。「セット」は、名詞本来の意味から、「役割に注目して一まとめにして数えることができる」という特性があるため、数える対象の事物の種類を問わず、「組」よりも柔軟な用法をもつ。名詞型助数詞は、典型的な助数詞と異なり、名詞をそのまま助数詞として用いることを特色としている。名詞を用いて対象を数えることにより、表現のバリエーションが生じ、さらに何をまとめ上げた表現なのか、ということが文脈の中でより明確になる利点があることが、「セット」の助数詞化に作用しているものと考えられる。

1. はじめに

日本語では事物を数える際に「紙1枚」の「枚」、「本1冊」の「冊」のように、助数詞とよばれる接辞を義務的に伴う。こうした助数詞は、「リットル」などの単位を除くと、数詞と切り離れた時に単独で用いることができないものとできるものとに分けられる。「枚」「冊」「匹」といったいわば典型的な助数詞は前者にあてはまる。後者は、「3大学」の「大学」、「3票」の「票」のように、「偶然ではなく、あるものを数える助数詞が、数えられる物を表わす名詞と同じ形態をとる（成田1990）」ものである。従来の助数詞研究は、前者の典型的な助数詞を対象とするものが多く、後者のような「名詞と同じ形態をとる」助数詞については十分な検討がされているとはいいがたい。本稿では、後者にあたる助数詞を「名詞型助数詞」とし、コーパスより収集した個別の語の用法を観察し、その特徴を考察していく。

以下、第2節では、「名詞型助数詞」の定義について、第3節では、本稿が分析の対象とする

「セット」の名詞の辞書的意味と類義語の選定について、第4節では調査概要、第5節では「セット」の調査結果、第6節では類義語となる「組」の調査結果について、第7節に、助数詞の機能から見る「セット」の特徴と、その特性から見る「セット」が助数詞として使用される理由を考察し、8節で「おわりに」としてまとめと今後の課題を述べる。

2. 「名詞型助数詞」について

数詞と切り離れた時に単独で用いることができる、「名詞型助数詞」の研究として先駆的なものは成田（1990）である。成田は名詞型助数詞¹⁾を意味領域により大きく4種に分類し、これらに抽象的な類型を示すものが多いことから、日本語の助数詞が貧弱であった範囲を補う形で使われている可能性を示している。

また、東条（2014）では、名詞型助数詞を、前接する数に制限がなく、「1、2、3…」と積み上げ式に数えることが可能かどうかという「可付番性」の有無により大きく二分し、可付番性のある、「助数詞に準ずる存在となる名詞」である「準助数詞」と、可付番性がなく、数と名詞の結びつきが臨時的であるため、数を自由に入れ替えることができない、見かけのみ助数詞を模した名詞である「擬似助数詞」という下位類を示した。「準助数詞」は、「何項目」や「何パターン」のように、不定数である「何」を冠することが可能であり、「抽象的な事柄を表す」ものが多いという特徴をもつ。一方で、「擬似助数詞」は「容疑者」や「患者」のように、「人物や機関など具体性の高い名詞を用いる」ことが多い、というように、両者は意味領域の面で違いがある。そして「名詞型助数詞」にはこのほか、「さら」や「はこ」のような容器を基準に物の数量を数える「容器型助数詞」があり、最も典型的な助数詞に近いものが「容器型助数詞」、最も助数詞から遠いのが「擬似助数詞」であるとした。しかし、東条（2014）は名詞型助数詞の分類概念の提示に留まっており、それぞれの類型の様相や特徴をより明確にしていける必要がある。

一方、名詞型助数詞にあたるものの個別の用法については、見坊（1965）が「車線」と「レーン」という助数詞を例に、新たな場面や生活に即して新しい助数詞が生まれることを指摘しているほか、「まとまり性」による「粒」の用法分析である伊藤（2004）、助数詞「店」の成立過程と意味を「店舗」との比較により分析した田中（2014）などがある。名詞と助数詞の連続性を論じた田中（2012）では、数詞に直結する独立形態素のうち、副詞的位置に立てる語の一部に「比較的若い助数詞」が含まれるとし、「数詞＋名詞」が新たな助数詞となる可能性を示している。

そこで、本稿では、典型的な助数詞に準ずる存在である名詞型助数詞の中から、個別の語と

して「セット」の用法に注目し、「セット」がどのような特徴を持つために準助数詞として用いられるようになったのかについて、各種コーパスを利用した調査にもとづいて考察を行う。

3. 名詞「セット」の辞書的意味と類義語の選定

東条（2014）では、『CD-毎日新聞データ集』より1991年の全紙面データを対象に、239種の「可付番性がある語」を抽出した。本稿ではこのうち「セット」を分析の対象とするが、それを選んだ理由は以下の通りである。第一に、典型的な助数詞に近く、助数詞として浸透していること、第二に、用法の比較のために類義の助数詞があること、である。「セット」は、『分類語彙表―増補改訂版』の中で〈抽象的關係〉に属し、中項目が〈量〉、中でも〈助数接辞〉に分類される語であるため、かなり助数詞として浸透しているといえる。また、外来語であるため、比較的近年に助数詞として用いられるようになったことが予想される。

次に、類義の助数詞についてであるが、「セット」は水口（2004b）によれば、個体が集まったグループが最小単位を形成していることを示す「集合類別詞」である。水口は集合類別詞の例として「セット」の他に、「対、足、束、輪、山、グループ、列、チーム」などを挙げているが、これらは「類義」ではない。そこで、辞書を参考に助数詞「セット」の元になる名詞「セット」の意味を整理し、語の意味がどのように規定されているかを確認した上で、類義の助数詞を選ぶことにした。

参照した辞書は以下の通りである。『精選版日本国語大辞典』（小学館）、『角川類語新辞典』（角川書店）、『基本外来語辞典』（東京堂出版）、『角川外来語辞典』（角川書店）、『日常外来語用法辞典』（丸善）、『日本語新辞典』（小学館）。

ここでは、上記の辞書の記述をカバーしていると思われた『日本語新辞典』の記述をベースに意味をまとめていく。

- ①いくつかの物を組み合わせた一揃い。使用効果を考えて、組み合わせて一組になっているもの。一式。通例2品以上が組みになっているものをいい、2品のものはペアという。
（例：ひな人形のセット／ステレオセット／3つでセットになっている）
- ②演劇の舞台や映画・テレビの撮影などに使う、背景や実物に模して作られた装置。セッティング。
（例：映画のセット／オープンセット）
- ③テニス・バレーボールなどで一試合をいくつかに分けた一つ。勝負の単位。
（例：第二セットの試合／セットポイント）
- ④（一スルの形で）

⑦道具・機械・装置などをきちんと使える状態に組み立てたり、調節したり、並べたりすること。

(例：テーブルにフォークとナイフをセットする)

④転じて、用意・準備・設定などをすること。セッティング。

(例：首相との会見をセットする)

⑤髪を整えること。

(例：美容院でセットした髪)

なお、『基本外来語辞典』によれば、英語では「据える」「置く」などが基本の意味で、そこから「ひとそろい」「ひとそろいの装置」などの意味が生まれたとある。このように名詞の「セット」は、さまざまな意味を備えているものの、「(形が) 整えられているもの」というような意味合いが一貫して見られるように思われる。そして、助数詞「セット」が用いられるのは、①のセットになっている物品を修飾する²⁾ 場合であるといえる。辞書の記述においても、助数詞「セット」は、「一揃いのものを数える語 (例：家具1セット)」(『類語新辞典』) や、「食器類・電気器具・ヒナ人形など何点かで全体を構成するものを数えるのに用いる」(鈴木・林 1973) 助数詞であることが記述されている。

以上の記述をまとめると、助数詞「セット」の基本的な用法は、家具、食器や雛人形など一揃いで販売・使用しているものなどの「組になってまとまっている物」を数えることといえる。

また、『使い方の分かる類語例解辞典 (以下、類語例解辞典)』によれば、「揃い」「組 (み)」「セット」がそれぞれ同じ項目で立てられており、これら3語は「いくつかがそろってある一つのまとまりとなるもの」という共通する意味を持つという。「揃い」はいくつかの種類の物が一つの目的のために使われるようなときに、「組」は、「別々にしても使える同種の品物の組み合わせ」で、「セット」は「きちんとできあがった組み合わせの時に」、という使い分けがなされるという。この、類義の語との違いを見ると、「セット」は、「きちんと組になってまとまっているもの」が特徴であるといえる。そして、この名詞「セット」の特徴が、助数詞として採り入れられた理由と、準助数詞としての定着に関わっていくことになる (7節で詳述)。

『類語例解辞典』の記述より、「組になってまとまっているもの」を数える「セット」の類義の助数詞としては「揃い」と名詞型助数詞である「組」が考えられる。本稿では、これらのうち「組」を「セット」の比較対象となる類義の助数詞として選んだ。「揃い」を対象としなかったのは大きな数とは結びつかないと考えたためである。なお、③の用法である、テニス・バレーボールなどの試合の区切りを数える「セット」も助数詞と捉えられるが、これは「組になっている物」を数えるのではなく、単位としての用法であるため、対象から外した。

4. 調査概要

4.1. 調査の目的

名詞型助数詞は、「典型的な助数詞が貧弱であった範囲を補う（成田1990）」可能性があるものである。その中で、「セット」は前節で確認したように、「一揃いになっているもの」「組になっているもの」など、いくつかの物のまとまりを数えるために用いられる名詞型助数詞である。貧弱であった範囲を補うのであれば、同じようにまとまりを数える名詞型助数詞「組」が既にあるにも関わらず、なぜ外来語である「セット」が助数詞として取り入れられたのだろうか。水口（2004a, b）は、新たな範疇を示すために外来語から借用された助数詞があることを指摘しているが、「セット」にも従来の助数詞にはなかった新たな範疇を数える機能があるのではないかと考え、それらを見出すために、類義の助数詞である「組」と比較しながら、用法を分析することにした。もし「組」と「セット」で数える対象や用法に異なる点があるならば、その相違点を明らかにすることで、「セット」の特徴に迫ることができると思われる。

4.2. 調査資料

助数詞を調査する上では、書き言葉の中でも新聞や雑誌のように、生活に密着した情報を伝達する媒体が適していると思われるため、これらをまず調査の対象とした。雑誌の資料としては、国立国語研究所の「月刊雑誌 70 誌の語彙調査」（1994）の用例データ³⁾を用いた（以下、雑誌資料）。そして雑誌資料と同年のコーパスである『CD- 毎日新聞 '94 データ集⁴⁾』を新聞の資料とし、両資料について、「セット」と「組」をキーとして grep 検索を行った。段落毎に観察しながら、先行詞（助数詞相当部分と一致する名詞）がどのような事物の数量を表し、どのような文脈で使われているのかに注目して分析を行った。

このうち、雑誌資料については、広告部分も対象に含めた。広告部分の記事では、修飾対象の事物の説明がなく不明瞭なものもあったが、文脈上、「数を数えている」と判断できる用例については、集計の対象とした。また、収集した用例を雑誌の内容種別ごとに示す際には、国立国語研究所（2005:18）の雑誌分類に従った。この分類は、調査雑誌全体を「総合・文芸」「女性・服飾」「実用」「趣味・娯楽」「芸術・科学」の5分野に分けたものである。

また、個別の語を対象とした研究の場合、複数の資料を対象に調査を行ったほうがより現実的に即した形での使用様相を知ることができると思われる。そこで、他の資料として、国立国語研究所の『日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を利用し、検索アプリケーション『中納言』にて、短単位検索で語彙素を「セット」ないし「組」とし、1990年以降の資料を対象に、それぞれ検索結果として出力した KWIC を観察した。複数あるサブコーパス（以下、SC）の

うち、「出版・雑誌」は先に述べた雑誌資料と重複するレジスターになるが、これらと重複したデータはないこと、また、用例数の補足になり得ることから、除外しなかった。なお、「出版・新聞」のSCについては、助数詞「セット」の用例が無かったため、対象から外した。

5. 名詞型助数詞「セット」の様相

5.1. 各資料における「セット」の使用と傾向

「雑誌」（雑誌資料と雑誌SC）、新聞、BCCWJより「書籍」（「出版・書籍」、「図書館・書籍」、「特定目的・ベストセラー」のSCを合算）、「特定目的・ブログ（以下、ブログ）」、「特定目的・知恵袋（以下、知恵袋）」、「特定目的・広報誌（以下、広報誌）」、「特定目的・国会会議録（以下、国会会議録）」のSCから得られた助数詞「セット」の用例数を【表1】に示す。

表1 各資料における助数詞セットの用例数

資料	用例数
雑誌	70
新聞	84
書籍	152
ブログ	124
知恵袋	31
広報誌	26
国会会議録	7
合計	494

以下、5.2節で「雑誌」における用例を、5.3節にて、1994年毎日新聞より得た用例を、5.4節では、BCCWJのSCに見る「セット」の用例を、それぞれ概観する。5.5節に、まとめとして、各資料における「セット」の特徴を述べる。

5.2. 「雑誌」にみる「セット」

雑誌から得られた、名詞を含む「セット」の用例数⁵⁾は459例であったが、これらの用例のほとんどは「アフタヌーンティーセット」や「ランチョンセット」といった「セットになっているものの名称」を示す名詞であった。これはBCCWJの雑誌SCにおいても同様で、550例中487例が名詞セットの用法であった。

このような名詞を除いた、どれだけの数の物が集合しているかを示す「セット」は雑誌資料、

雑誌SC合わせて159例であったが、「三点セット」など、「数量詞（数詞＋助数詞）」＋「セット」の形式が89例であったため、数詞にセットが直結する例は70例となった。このうち、数詞1の英語読み＋セットである「ワンセット」の例が5例あった。

資料を4.2節の雑誌分類に従って種別ごとに分け、「セット」が数えていた対象を一覧にしたものが【表2】である。表2では、数えていた対象物のうち、大きく〈人間〉〈人間の動作〉〈具体物〉〈その他〉に分け、〈具体物〉については、グループ分けできるものをまとめ、小項目として立てた。3節で述べたように、「セット」は、「組になってまとまっているもの」を数える助数詞である。そのため、具体物の下位分類として、〈組み合わせて使うもの〉という項目を立てた。また同様に、どのような組み合わせになっているか想像しづらいものには、〈形状が想像しにくいもの〉という分類項目を作成した。

雑誌の「セット」において、最も多かったのは〈具体物〉を数える例である。具体物を数える例の中では、「自動車部品」「化粧品」「レンズ部品」「スキー用具」などの、〈組み合わせて使うもの〉が最も多く、辞書の基本的な意味通りの結果になっているといえるだろう。用例は少ないが「食器（ここではカトラリー）」なども、セットで使うものであることが一般的に認識されているものといえるだろう。

具体物のうち、約30%は〈形状が想像しにくいもの〉であった。これは、専門用語によって表される具体物であるために、一読すると何を数えているのか、またどのような形状のものなのか分からないものである(1)(2)。これにあたるものは全て「趣味・娯楽」ジャンルの雑誌から得た用例であり、その分野の知識がない読み手には、想像しづらい例といえる。

(1) スミスパトラックス〔各限定20セット〕送料・TAXサービス！（つり人⁶⁾）

(2) 賞品は、表彰式パーティでワールドカップ出場選手のみに配られた非売品の「KWC Dubai 二千四」ロゴ入りボールポイントレンチ（1.5～3.0mmの4本入り1セット）
（ラジコンマガジン）

雑誌という媒体においては、写真により視覚情報を得られるため、文脈内での詳しい説明を省いているのではないと思われる。こうした例では、対象物に関する詳細な説明がなく、「セット」という助数詞を用いて初めてその名詞が「何らかのまとまりを成すもの」とであると理解できるものだといえる。

そのほか、〈その他の具体物〉として、単独で用いることができるがセットとしてまとめているもの（「フィギュア」「カラビナ」など）や、セットと名付けてあるもの（「セット券」「セットトウリング」など）をまとめた。これらは、「セット」で数える（名付ける）ことによって、まとまりを成している例であると考えられる。

具体物の次に多いのは〈人間の動作〉を数える例である。これは(3)(4)のように、スト

表2 雑誌種別による「セット」の数えた対象

	趣味・娯楽	女性・服飾	総合・文芸	実用	芸術・科学	総計
具体物	24	11	4	4	4	47
組み合わせて使うもの	9	10	2	1	4	26
自動車部品	6		1			7
タイヤ	4		1			5
LED	1					1
スポーツミラー	1					1
化粧品		6	1			7
マスク		3				3
香水			1			1
化粧品サンプル		1				1
シート		1				1
アイシャドウ		1				1
引き出物		4				4
レンズ部品	1				2	3
レンズ					2	2
望遠鏡	1					1
スキー用具（貸しスキー）	2					2
食器（カトラリー）				1		1
形状が想像しにくいもの	14					14
キャリアパーセット	5					5
スーパーカナード	2					2
イカー番	2					2
解禁セット	1					1
ボールポイントレンチ	1					1
高級ローターケース	1					1
フロント部	1					1
スミスバトラックス	1					1
その他の具体物	1	1	2	3	2	9
フィギュア			2			2
健康食品				1		1
特製ファイル					1	1
カラビナ	1					1
ゲーム				1		1
カラスキン				1		1
足もとセットトゥリング		1				1
セット券（コンサート）					1	1
人間の動作	8	7	4			19
運動	8	7	4			19
動き	2	6	4			12
走り	5					5
ベンチプレス	1					1
行為		1				1
人間			1			1
監督とコーチ			1			1
その他	1			1	1	3
写真とタイトル					1	1
種目	1					1
記載なし				1		1
総計	33	18	9	5	5	70

レッチやトレーニングなどに必要な一連の動作をまとめて数える用法であった。

- (3) 再び、重心を元に戻す。次に重心を右足に移し、左足を手でつかんで片足立ちをし
て1セット (BIG Tomorrow)

- (4) 親指を立てるように、ギョッギョッと5～7回押
します。少し強めに5セットずつ左右のツボを同
様に押します。(女性セブン)

こうした〈人間の動作〉を数える例は19例あったが、雑
誌別に見ると、「女性セブン」で6例、「陸上競技マガジン」
で4例、「ソフトボールマガジン」で3例と、やや同一の雑
誌に用例が集中する傾向にあるといえる。

また、数は少ないものの、1例のみ〈人間の集合〉を数
える例も見られた。これは、「監督とコーチ」のまとまり
を「ワンセット」と数えた例である。このほかに人間を数
える例は見られなかったため、特殊な用法であるといえる
だろう。

- (5) 中でもガククリなのは、HとワンセットでTが
チーフ打撃コーチとして乗り込んできたため、一
軍打撃コーチから二軍に配置転換となったHコー
チですかね」(週刊ポスト／人名は筆者によりア
ルファベット表記)

「ワンセット」という用法ではこのほか、「写真とタイト
ル」という組み合わせを数える例もあり、これは〈その他〉
として分類した。

雑誌種別ごとに見ると、最も多く「セット」が用いられ
ていたのは「趣味・娯楽」(46.2%)であった【表3】。同
じ雑誌でくり返し使われた例(「BE-PAL」では5例全てが
「キャリアバーセット」を数える例であるなど)もあるもの
の、用例数、雑誌数ともに最も多かったのがこの分野であ
る。「趣味・娯楽」という性質上、専門用語で示される例も
多く、「セット」が用いられやすかったのではないかと推測
できる。

また、具体的な事物を数える用例においては、47例中31

表3 雑誌別「セット」の用例数

総合・文芸	9
sabra	2
一個人	2
週刊プレイボーイ	1
オール讀物	1
週刊ポスト	1
Tarzan	1
月刊BIG tomorrow	1
女性・服飾	18
女性セブン	6
Hanako	4
LEE (リー)	2
美的 (BITEKI)	1
すてきな奥さん	1
an・an	1
婦人公論	1
MORE	1
PS	1
趣味・娯楽	33
陸上競技マガジン	5
BE-PAL	5
つり人	4
AUTO SPORT	3
OPTION2	3
ソフトボールマガジン	3
ラジコンマガジン	2
CG CAR GRAPHIC	2
旅行読売	2
ARMS MAGAZINE	1
週刊ゴルフダイジェスト	1
月刊天文ガイド	1
ラジコン技術	1
実用	5
栄養と料理	1
安心	1
ベビーエイジ	1
dancyu	1
LOGiN	1
芸術・科学	5
アサヒカメラ	2
Newton	1
四季の写真	1
音楽の友	1
総計	70

例が商品の広告など、PRの文脈であったことも特徴的であった。とくに、「雑誌資料」においては、23例中15例が商品のPRと読み取れるものであった。このことから、商品をセットにして売り出すという文脈で、助数詞「セット」が用いられていると考えられる。

以上のように「雑誌」の用例を見てきたが、専門用語で示される具体物のように、一読すると数える対象の〈形状が想像しにくいもの〉の例がまとまって見られること、〈人間の動作〉を数える例がある程度見られることが特徴的な結果となった。

5.3. 新聞にみる「セット」

次に、新聞における「セット」の用例について述べる。資料は『CD-毎日新聞データ集'94』の全紙面データを用いた。雑誌資料と異なり、新聞データには広告の文章は含まれていない。用例数は全体で84例であった。紙面別にみると、最も多かったのが全体の4割弱となる「社会面」の33例で、次に「総合面」(16例)、「経済面」(13例)と続くが、他は10例未満の使用であった。【表4】を見ると、ほとんどの用例が〈具体物〉を数えていることがわかる。また、雑誌においては、〈形状が想像しにくいもの〉や

〈人間の動作〉の用例がある程度まとまった数で得られたのに対し、新聞では、こうした用例はほとんどなく、特に、〈人間の動作〉を数える例については1例もなかった。雑誌とは異なる傾向を見せているといえる。このうち、使用文脈において、何らかの特徴が見てとれるものを中心に、用例を概観する。

新聞の用例で最も多かったのは、何らかの形で〈セットと規定しているもの〉、つまり、セット形式のものを数える例である。〈記念品・限定品〉では、貨幣セット・乗車券など、何らかのイベントを記念して発売される品物を数えている。これらの例は(6)のように、廃業の知らせ、あるいは、節目の年であるということを先に述べた上で、発売される記念品についての情報を付け加える、といった流れの文章が多かった。また、こうした記念品を数えている例で

表4 1994年毎日新聞における「セット」の数えた対象

具体物	用例数
セットと規定しているもの	30
記念品・限定品	17
本・冊子	7
文具	2
バケツ稲作りセット	2
水子地藏六体	1
都市対抗グッズ	1
組み合わせて使うもの	10
スポーツ用品	4
衣類	2
自動車用品	2
事務用品	2
形状が想像しにくいもの	13
機材・システム	8
兵器	5
単独でも使用可のもの	27
食品	6
玩具	6
カード・はがき	4
電化製品	4
CD	3
生活用品	2
マスコットキャラクター	1
補修剤	1
その他	4
DNA・遺伝子	3
作詞・作曲	1
総計	84

は、ほぼ全ての用例が、企業側から消費者への記念品販売を目的としたPRの記事であり、17例のうち15例が社会面での使用と、紙面にも偏りが見られた。なお、〈記念品・限定品〉と使用されている文脈に近いものとして、6例の〈食品〉もここに挙げられる。〈食品〉は、〈記念品〉とは異なり、元々セットになっている事物を数えているのではなく、個々のもの（単独でも使用・利用可能なもの）を「セット」というひとまとめの形にすることで、賞品や景品としての特徴をもたせるという役割があると考えられるが、これらが使用されていたのは全て、読者へ向けた懸賞・プレゼント情報などのPRの文脈であった。このため、「記念品・限定品」と近い文脈で使用される語だと思われる。

- (6) 31日で会社解散・廃業するN電鉄(W県K市、T社長)は、29日から3日間、「さよなら電車」を運行する。2種類の記念乗車券6000セット(1セット920円)も18日から発売。(3/18 文化)

また、新聞にも〈形状が想像しにくいもの〉の例はあるが、雑誌のように商品名のみではなく、「機材・システム」や「兵器」のような、いわば巨大なものを数える例が多く、商品名のみを示す例の多かった雑誌とは異なる結果となった。

- (7) ミサワホームは7月に売り出した「太陽光発電システム」≒写真≒の普及促進のため、9月から3カ月間、1セット330万円で700セットの限定販売を始めた。(9/8 特集)

- (8) 航空自衛隊では八九年度から「従来型」の配備が始まり、現在、北海道千歳基地をはじめ青森県三沢、埼玉県入間、岐阜県岐阜、福岡県春日の五基地にある高射隊がパトリオットを装備している。「レーダー装置」「射撃管制装置」「発射機」の“三点セット”が一高射隊の装備で、一セットの価格は約二百億円。(2/3 総合)

〈機材・システム〉は、「太陽光発電システム」や「海水淡水化装置」などのような、具体的な形やしくみが想像できないものを一つの項目としてまとめたものである。これらの例のほとんどは(7)のように、「1セット〇〇万円」と値段の記載があり、さらに高価なものであるという特徴があった。「太陽光発電システム」などの「システム」や「装置」は、部品一つで稼動できるものではないため、「セット」で数えてまとまりを示すということも考えられる。〈機材・システム〉にあたるものは、数えられている対象の事物だけを見ても、どのような形を成しているのか、何と何がまとまりを成しているのか理解しづらいものが多かった。そのためか、(7)のように、「写真(波線部)」など情報を補完しているものもあった。また〈兵器〉は、主にミサイルあるいはロケットを数える例であった。従来、ミサイルやロケットは漢語助数詞の「基」で数えるはずであるが、ここでは「基」は用いられず、「セット」で数えている。(8)をみると、「レーダー装置」「射撃管制装置」「発射機」のように、知識がなければ「まとまってい

るもの」と認識しづらいであろうものも、「セット」で数えることにより、これら三種のものが一つのまとまりを成していると理解できる文脈になっている。また“三点セット”と記述することでまとまりを強調し、読み手を配慮した書き方になっているともいえる。このことから、「セット」は修飾する対象の事物の大きさや読者の知識の有無に関わりなく用いることが可能であると考えられる。

そのほか、表4を見ると、本・冊子、葉書・カード、CD、衣類、スポーツ用品、将棋盤・駒、地蔵など多様なものを「セット」で数えていることがわかる。これらの物は「セットになっているもの（セットと名付けたもの）」「単独でも使えるがセットにしているもの」「通常組み合わせて使うもの」など、ほとんどが何らかのまとまりを成しているものであった。また〈機材・システム〉や〈兵器〉などの用例と同様に、これらについても「セット」で数えたものがどのような構成であるのか、というまとまり方が一読して理解しづらいものには、(9) (10) のように内容の記述があった。また数は少ないものの、「二枚組」のCD、と敢えてまとまりを説明した上で、「千セット」と数えている例なども見られた(11)。

(9) 百貨店などの浴衣のコーナーはどこも好調。色とりどりの浴衣が並び、選ぶのに目移りしそうです。「花火を見に行くのにやっぱり洋服ではさみしいからと、浴衣に帯、下駄と一セットでの購入が多い」(丸井S店) とのこと。 (8/17 家庭)

(10) 約三日間で、高さ約四十五センチの水子地蔵が完成。ハンドメイドなので、細面、丸顔と表情は千差万別だ。六体一セットで木箱に詰められ、トラックからコンテナ船に乗り換え、横浜、神戸の港に入ってくる。 (11/15 3面)

(11) 制作されたCDは二枚組で千セット。Oさんが九一年十二月に福岡市で開いたりサィタルや音楽院の卒業演奏会、現地の国営放送が放映した演奏を編集した。

(4/7 社会)

(11) に「枚」や「組」を用いると、「二枚組のCD 二千枚」・「二枚組のCD 千組」などと同じ助数詞が続いて冗長な表現となる。また、「二枚組のCD 二千枚」の方は、商品としての最小単位(二枚で一組)と考えた場合に何部あるのかがすぐには理解しづらく、読み手側の認識に負担がかかる。「セット」という助数詞を用いることで、「二枚組」というCDの属性を述べながら、総制作枚数についても同時に言及することができるといえる。

以上、新聞資料の用例を見たが、新聞の「セット」は単独で利用できるものを含め、〈セットと規定しているもの〉や〈組み合わせて使うもの〉を数えるという辞書的意味通りの用法であること、またそうした例の多くは懸賞などの応募をつのる文脈で用いられることが見受けられた。そして、新聞には、雑誌である程度見られた〈人間の動作〉を数える用例がないため、こうした用法は新聞などの書き言葉においては(少なくとも1994年時点においては)まだ浸透し

ていないことが読み取れる。

5.4. その他のコーパス

本節では、雑誌資料、新聞以外に収集した BCCWJ の SC の結果について、各資料の特徴的な点に注目して述べていく。

5.4.1. 書籍にみる「セット」

「書籍」では、152例の用例が得られた。今回収集した資料の中では最も多い用例数となった。それぞれの図書分類ごとに、〈人間〉〈人間の動作〉〈具体物〉〈その他〉の例を集計したものが【表5】である。

表5 「書籍」資料における「セット」の数えた対象

分類	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術・工学	産業	芸術・美術	文学	分類なし	総計
具体物		1	12	13	3	16	4	2	14	8	73
人間の動作			1	4	11	9		2	4	5	36
人間						1					1
その他	1	4	2	11	12	1		2	9		42
総計	1	5	15	28	26	27	4	6	27	13	152

表5を見ると、最も多いのが〈具体物〉である点は雑誌・新聞と変わらない。〈具体物〉では、〈組み合わせで使用するもの〉〈セットとして規定しているもの〉〈単独でも使用可のもの〉の範囲を出るものはなかったが、「工場から商店街から住宅地までも一セットにした」のように、住居や街全体といった、かなり大きな具体物をも数えていたのが特徴的であった。また、新聞や雑誌に多かったPRの文脈での使用はほとんどなかった。

「書籍」の、他の資料に見られなかった最も大きな特徴は、〈具体物〉でも、〈人間の動作〉でもない〈その他〉の例が多いことである。〈その他〉では、染色体・DNAなど「遺伝子、染色体」にあたるものが10例、「エネルギーとテクノロジー」「理念」「情報」など抽象的な概念などを表すものが8例、「印籠と水戸黄門」「明細・伝票・顧客」「作物と家畜」といった、有情物と具体物の組み合わせが4例見られた。また、〈人間の動作〉を数える例では、雑誌で見られたようなストレッチやトレーニングなどのいわゆる「運動」に留まらず、(12)のように、より複雑な一連の行為の流れを数える例もあった。

- (12) 今日、クルマで来たんですよ。歩きながら村上は言った。横で歩を進めながらも、なるほど、と思う。この男、最初からあたしを食事までワンセットにして誘うつもり

だったのだ。(君たちに明日はない)

ただし、こうした〈その他〉にあたる例のうち27例は「ワンセット」であり、残りの15例も「1セット」ないし「一セット」であったことを考えると、このように幅広いものを数えているのは、「1」という数詞の特殊性が要因として関わっているためと考えられる。しかし、少なくとも、「ワン(1)セット」と表現するときには、「2以上の数詞+セット」よりも、セットを構成する要素の自由度が高いと捉えられるだろう。また、〈人間の動作〉を数える例では、健康・ダイエットに関わる書籍からの例が23例であった。

5.4.2. ウェブ資料にみる「セット」

次に、「ブログ」SC、「知恵袋」SCにおける「セット」の用例について見る。これらはいずれもインターネットからの資料であるため、「ウェブ資料」という同じレジスターのものとして捉えたい。各資料の用例数と分類を【表6】に示す。

表6を見ると、最も際立った特徴として〈人間の動作〉を数える例が多いことが読み取れる。ブログでは6割、知恵袋では半数が〈人間の動作〉を数えている。ここでは、「片足膝上げ 横向き、前後、前向き各スキップを同じく各2セットして二十四～二十五分(ブログ)」といったトレーニング内の細かい動きを数える例のほか、「今日は八百mを2セット、二百mを2セット、四百mを1セット、最後に平泳ぎ百mです。(ブログ)」のように、水泳などの運動に対して数えている例も見られた。このように見ると、ウェブ資料では〈人間の動作〉を数える「セット」は、比較的定着した用法であるといえるだろう。このような、動作の流れをひとつの「組み合わせたもの」として捉えた上で「セット」でまとめて数える用法は、辞書には記載がなく、基本的な用法からずれたものであると思われる。また、雑誌や書籍にお

表6 ウェブ資料における「セット」の数えた対象

分類	ブログ	知恵袋	総計
人間の動作	78	15	93
具体物	44	15	59
人間	1	0	1
その他	1	1	2
総計	124	31	155

表7 「広報誌」「国会会議録」における「セット」の数えた対象

〈広報誌〉	26
具体物	21
セットと規定しているもの	16
ゴミ袋	5
チケット	3
景品	1
材料	1
食品	1
年賀ハガキ	2
肥料	2
米	1
組み合わせて使うもの	4
ストック	1
家具	1
布団	2
単独でも使用可のもの	1
風呂	1
人間の動作	3
運動	3
その他	2
レッスン	2
〈国会会議録〉	7
具体物	7
セットと規定しているもの	3
貨幣セット	3
組み合わせて使うもの	2
鏡、曲玉、刀	2
形状が想像しにくいもの	2
ミサイル	2
総計	33

いては使われる資料や分野に偏りがあり、このようにウェブ資料において活発に使われることから、「セット」の新たな用法である可能性がある。

5.4.3. 「広報誌」、「国会会議録」に見る「セット」

「広報誌」SCでは26例、「国会会議録」SCでは7例と、これらのSCからはあまり用例を得ることができなかった。前頁の【表7】では、得られた用例を分類したものを載せた。「広報誌」では具体物の全てが文脈内で〈セットと規定しているもの〉か、元々〈組み合わせて使うもの〉であった。〈人間の動作〉を示す例も少なく、資料の特色となるような傾向は見られない。また、何らかのイベントの概要を説明し、参加者や応募者をつのるPR的な文脈で使われることが多いなど、新聞に似た傾向を見せていると考えられる。「国会会議録」については、「貨幣セット」「ミサイル」「鏡、曲玉と刀」の3種しかなく、また、これらはそれぞれ一つの委員会の中での発言であった。なお、「鏡、曲玉と刀」の例は、三種の神器をまとめて「ワンセット」と表現する例であった。

5.5. 各資料からみる「セット」の用法

以上、限られた年数分であるが、雑誌、新聞、書籍、ウェブ資料、広報誌、国会会議録の「セット」の用法を概観した。これらの資料における「セット」は以下のようにまとめることができる。

- ①数えられる対象の事物の詳細な情報がなくても数えることができる
- ②数えられる対象の事物は、形状や大きさに制限がない
- ③〈人間の動作〉を数える用法が一般化しつつある
- ④有情物は基本的に数えることができないが、「ワン（1）セット」という形であれば、まとめることが可能である。

①について、雑誌資料では「趣味・娯楽」分野での使用が多く、ジャンルの特性のためか、「専門用語で示される」〈具体物〉を数える例が目立った。こうした例では、商品に関する詳細な記述がなく、一読すると何を示しているのか分からないものもあった。詳細な記述がない理由としては、「専門性が高い雑誌であるため、読者に知識があることを前提としている」または、「実際の紙面では写真による情報が得られるため、詳細な説明が不要」であることなどが考えられるが、いずれにしても、「スミスバトラックス限定20セット」のように、「セット」は商品の詳細な説明がなくとも数える対象としていた。また、新聞においても、「太陽光発電システム」のように、知識がないとどのような組み合わせのものか分からないものについて、「セット」と数えることでこれらが何らかのまとまりを成すものであると明示することができていた。この

ことは「指し示すまとまりの中身が不明であるものについても、数えることができる」という、セットの柔軟性の高さを示すといえるだろう。

②については、新聞や書籍において「太陽光発電システム」「ミサイル」「住居」「街」といった巨大なものを数えていた点から、「セット」の数える対象は、形状の大小を選ばない、といえる。

③は、ストレッチなどの一連の動きや、スポーツにおけるトレーニングのメニューなどの、〈人間の動作〉を数える例である。こうした〈人間の動作〉は具体物でないため、形状がないものである。こうした用法は辞書の記述にはないものの、新聞以外の資料では〈人間の動作〉を数える例が得られたこと、とくに、ウェブ資料ではこうした用法が活発に用いられていたことから、〈具体物〉だけではなく、〈人間の動作〉をひとまとめにして数える用法が新たに生まれ、定着しつつあることがうかがえる。

そして④であるが、基本的に「セット」は人間などの有情物を数えることができないが、「ワンセット」という表現を用いれば、数えることが可能である。また、こうした表現を用いると、書籍で見られた「食事までワンセットにして誘う」のような、時間の幅を持つ行為の流れをも一つのまとまりとして捉えることが可能になると考えられる。

6. 名詞型助数詞「組」の様相

6.1. 各資料における「組」の使用と傾向

名詞型助数詞「組」では、雑誌、新聞のほか、BCCWJの「広報誌」「書籍」「教科書」「ブログ」「知恵袋」SCから用例が得られた。全体の用例数を【表8】に示す。

表8 各資料における助数詞「組」の用例数

	雑誌資料	新聞	広報誌	書籍	教科書	ブログ	知恵袋	総計
人間	103	711	443	20	2	24	1	1304
具体物	45	38	1	39	0	0	1	124
その他	0	11	1	8	2	3	1	26
総計	148	760	445	67	4	27	3	1454

助数詞「組」の用例は、大きく、〈人間の集合〉と〈具体物〉に分けることができたが、表8の通り、ほとんどが〈人間〉を数える例であった。人間の集合を数えない「セット」とは大きく異なる結果であった。5節では、資料ごとに用例を見たが、6節では、〈人間の集合〉〈具体

物〉〈その他〉と、数える対象から「組」の用法を確認していく。

6.2. 〈人間の集合〉を数える用法

「セット」は〈人間の集合〉を数える用法を持たない。そのため、本項目は比較対象とならないが、「組」の用法について言及するため、ここで簡単に概観したい。〈人間の集合〉を数える例は、大きく、特定の文脈で用いられるものと、そうでないものの二種に分けられた。前者にあたるのが「懸賞等の公募人数」であり、それ以外の項目が後者である。「懸賞等の公募人数」は、懸賞など応募者をつのる文脈で頻繁に使われ、数えている対象は招待者など、懸賞の当選人数である(13)(14)。この場合、1組あたりの人数はほとんどの場合2人である。

(13) 来日公演プレビューにぴあ読者三十組六十名ご招待!! 誰よりも早く『ビーシャ・ビーシャ』を体験したいあなたに、とっておきのプレゼント。(Weeklyぴあ)

(14) 大道芸ワールドカップin静岡に出場するパフォーマーのプレビューショーに、三百組六百人をご招待します。(広報しずおか)

(13)のように情報の受け手である読者へ向けた、懸賞等の募集の文脈での使用は多く、ある種定型的に使われる表現だといえる。〈人間の集合〉を数える例のうち、こうした使用は雑誌では101例中30例と多くはないものの、新聞では半数近い338例が、「広報誌」では435例とほとんどの例が、この用法であった。新聞・広報誌・雑誌は、資料の性質上、読者に向けた懸賞等の募集の記事を多く含んでしまうものと考えられる。

一方、こうした「懸賞等の公募人数」を除くと、用例の違いは、どのような人物のまとまりであるか、という点になる。下位分類すると、「コンビ、バンド」(ミュージシャンやお笑い芸人など、複数人で活動している集合を数えているもの)、「ペア」(夫婦やカップルなど、男女の組み合わせによる集合)、「選手」(ダブルスのためのペアなど)、「家族」(男女以外の血縁による集合)、「グループ」(複数人で集合をなしているものや、それ自体を数えているもの)、その他これらに当てはまらない集合の六つに分けられると思われた。これはどの資料においても共通しており、〈人間の集合〉を数える「組」の用法は、資料ごとのばらつきはほとんどないと思われる。

6.3. 〈具体物〉を数える用法

具体物を数える用法では、大きく〈組み合わせて使うもの〉と〈単独でも使用可能なもの〉とに分けることができた。また、「セット」と同様に、名詞だけでは〈形状が想像しにくいもの〉も一つの項目としてまとめた。資料ごとの用例をまとめたものが【表9】⁷⁾である。

〈組み合わせて使うもの〉は、二つ(以上)の個体がそろって初めて一つの商品として成り

立つような、単体で切り離しては使わない物を指す。大きく、「カード類」「ボタン類」「衣類」「家具」「機材」「食器」「人形類」「パン（サンドイッチ）」に分けられた。こうした、元々組になっている事物では、(15) (16) のように、組み合わせられている物の内訳は明記されていないことが多い。また、数えられている対象の名詞も、ほとんど一般的に知られているものばかりであった。

(15) 用意するものは、軍手1組とボディーシャンプー、または石けんです。やり方はオイルマッサージとだいたい同じです。（安心）

(16) 和室天井部分のトップサイドライトと収納。収納部分は1組のひな人形と2組の五月人形を収めるためにつくられました。（新しい住まいの設計）

一方、〈単独で使えるもの〉や〈形状が想像しにくいもの〉、例えば、専門用語で示される具体物などは、(17) (18) の「2個1組」「6枚1組」「4点1組」のように、「組」でまとめられているものの構成が別の数量詞とともに明示されていることが多かった。

(17) エアーホイル用ホイルロック 2個1組（ラジコン技術）

(18) 〈セット内容〉本体、暗室ボックス、暗室カーテン、ネガホルダー、フィルター、カラーフィルター（6枚1組）〈中略〉、カラー現像漂白定着液4点1組

（月刊カメラマン）

(18) の「カラーフィルター」「漂白定着液」などは、カメラに詳しくなければ、どのような大きさで、また、いくつで一組になるものなのかも想像しづらい。このように、「組みにして使うもの」であるということが読み手に伝わりにくい場合、“何と何の組み合わせ”なのか理解しやすいように、「組」で示すものの中身を「まとまりの内訳＋1組」として、文中に示すのでは

表9 「組」で数えた具体物

分類	雑誌	書籍	新聞	総計
組み合わせで使うもの	24	19	11	54
カード類	1	8		9
ボタン類	6			6
衣類	5	1		6
家具		7		7
機材	1		2	3
食器	1			1
パン（サンドイッチ）	6			6
人形類	2		1	3
その他：	2	3	8	13
貝（3）、ティッシュ（2）、ボルトとナット、マスク、花卉、せん茶セット、記念メダル、銀杯、青春18きっぷ、組み写真				
	雑誌	書籍	新聞	総計
形状が想像しにくいもの：	8	1	1	10
ホイルロック（2）、カラーフィルター、カラー現像漂白定着液、ハブ、プリアウト端子、駒台、糸付き鉤、トラス、箆（おさ）				
	雑誌	書籍	新聞	総計
単独でも使用可のもの：	13	19	26	60
和歌（8）、LED（8）、絵はがき（4）、書類（4）、ケーブル（3）、作品（2）、写真（2）、折り紙（2）、スピーカースタンド、ファッションデザイン画、マウスとキーボード、菓子、PC、アルバム、イカ釣り舟、オムツ、お祝い金、カード、カードケース、ネクタイ、フィルム、菓子、画素、巻物、原画、作品、糸、写真、写真パネル、書籍、小さな泥人形、色紙、折り紙人形、揚げ糸、輪ゴム				
	雑誌	書籍	新聞	総計
総計	45	39	38	124

ないかと思われる。

6.4. その他の用法

〈人間の集合〉、〈具体物〉以外を数えた用例は、全体で26例（1％）と数は少ないものの、〈人間以外の有情物〉（主につがいの動物）や、「遺伝子、染色体」を数える例が目立った（19）。

- （19）「3倍体カキ」は、体が3倍という意味ではない。細胞内の染色体が、普通よりも1組多いカキのことだ。動物の体は一般に、2組の染色体から成る2倍体。精子や卵の生殖細胞は、それぞれの染色体が1組だけで、双方が一緒になる（受精する）ことで2倍体となる。（8/8 科学）

こうした染色体を数える例は、「セット」でもいくつか見られた。有情物を数えない「セット」、有情物（人間）を主に数える「組」の両項目で数えられている、遺伝子や染色体は、「生物と無生物の中間」にある存在とも捉えられる。

また、そのほか、「4桁の数字 2組」のように、数字や番号、記号を数える例などが〈その他〉にあたる例として得られた。

6.5. 「組」の用法のまとめと「セット」との相違点

ここまで見た組の用法をまとめると、以下のように整理することができる。

- ① もっぱら、〈人間の集合〉を数えるために用いられる。
- ② 〈組み合わせて使うもの〉以外は、何と何の組み合わせになるのか、という内訳が必要となる。
- ③ 〈人間の動作〉を数えることはない。

助数詞「組」は、複数の資料に共通して、〈人間の集合〉を数える場合に多く用いられる。とくに、新聞や広報誌においては、「懸賞等の公募」という文脈に偏って用いられるという結果となった。「〈人間の集合〉を数えられる」という点が、「セット」との最も大きな違いだといえるが、これは実際の用例を見るまでもなく明らかである。

では、〈具体物〉を数える場合の「組」と「セット」の相違点とは何かといえば、②にあるといえるだろう。「組」は、「組み合わせて使うことが前提であるもの」と「単独でも使用可のもの（あるいは、組み合わせて使うという認識が一般的でないもの）」の両方を数えることができるが、組み合わせて使うことが周知でない場合は、「4点1組」「2個1組」のように、あらかじめどのような物の集まりであるのかを、「点」や「個」といった助数詞を用いた上で示すという傾向が見られた。一方、「セット」は、数えられた事物について「元々まとまりを成すもの」という認識が読み手にあるかないかに関わらず、「セット」で数えることができていた。

このことは、前掲の(17)(18)のような、何と何の組み合わせであるか一読すると分からないものについて、以下のように「セット」で置き換え可能である点からもいえる。

(17') エアーホイル用ホイルロック2個1(組／セット)

(18') カラーフィルター6枚1(組／セット)、カラー現像漂白定着液4点1(組／セット)

また、③で示したように、「組」は〈人間の動作〉を数えることができないが、「セット」は、こうした具体的な形のないものを数えることができる。これらの点から、数える対象のまとまりの自由度が高いことが窺えるだろう。

しかし、反対に、「組み合わせて使うことが前提であるもの」を「セット」で数えることで、違和感を覚える場合もある。

(13') 用意するものは、軍手一(組／??セット)とボディーシャンプー、または石けんです。

(14') 収納部分は1(組／??セット)のひな人形と2(組／??セット)の五月人形を収めるためにつくられました。

このように「組」を「セット」でいいかえると、2枚一組の軍手が複数まとまっている様子、あるいは2体で一組のひな人形が複数あるような状況がイメージとして浮かぶように思われる。とくに「軍手1セット」と「軍手一組」では、感覚的に、示される数のイメージが異なり、すわりが悪くなるように思われる。軍手やひな人形のように、ペアで初めて一つの品物として完成するものについては、背景知識に「二つで一つ」という認識があるため、「軍手1セット」のように数えられていると、「一組」よりももっと数が多い印象を受けるのではないだろうか。ただし、どのような場合に入れ替え可能で、どのような場合に不自然かという条件については、意識調査などを取り入れながら、今後改めて検証する必要がある。

7. 名詞型助数詞「セット」の特性と助数詞として使われる理由

5節・6節では、複数の資料を用いて、類義の名詞型助数詞「セット」と「組」の用法を概観した。本節では、なぜ、またどのような利点があるために外来語である「セット」が助数詞として使われているのかを、典型的な助数詞が持つ機能を踏まえた上で考察する。

7.1. 助数詞が本来的に備えている機能と「まとまり性」

水口(2004a, b)によれば、助数詞⁸⁾は、名詞を分類する「範疇化」の機能と、数に対して中立的な名詞を「個別化」する機能を備えているという。前者は、例えば、動物を数える際に「頭」「杯」「羽」「尾」のように異なる助数詞を用いることで、対象を「大きなもの、貴重なもの

の「甲殻類」「鳥」「魚」のように下位範疇化するはたらきのことである。また後者は、認知的に最小単位が決まっている名詞を「個別化」して数える機能のことである。そしてこの「個別化」により、助数詞は、「匹」や「個」のような個体そのものを最小単位と認知しているもの（「個別類別詞」）、「セット」や「対」のように個体のいくつかの集まりを最小単位とするもの（「集合類別詞」）、液体など量が定まらないものを「カップ」や「匙」のような入れ物によって個別化し、最小単位とするもの（「計量類別詞」）の三種に分けられるとされる。

3節でも述べた通り、「セット」や「組」は、水口のいう「集合類別詞」にあたる。いくつかの集まりを最小単位として個別化する働きを備えているといえるだろう。そしてこうした「個別化」の機能に着目し、まとまり性という観点から助数詞の分類を行っているのが伊藤（2004）である。伊藤（2004）は、物を数える際の観点として、物質の個別性の度合いと焦点のあて方が重要であるとしている。助数詞⁹⁾は「個体」／「まとまり」と「個別性の高さ」／「個別性の低さ」の組み合わせによって四種類に分類でき、個体に焦点があたっているときは個体の数が数えられ、まとまりに焦点があたっているときはまとまりの数が数えられることを指摘している（【図1】）。





<div style="display: inline-block; text-align: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> 焦点 個別性 </div> <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div> </div> </div>	個体	まとまり
	高	低
高	<div style="text-align: center;">  タイプ1 </div>	<div style="text-align: center;">  タイプ3 </div>
低	<div style="text-align: center;">  タイプ2 </div>	<div style="text-align: center;">  タイプ4 </div>

図1 伊藤（2004）による助数詞の分類

図1の「タイプ1」は、「リンゴ3個」のように、個別性が高い物質の、その物質自身に焦点をおくことができるもの、「タイプ4」は、「水2リットル」のように個別性が低い物質を容器や度量衡によって区切り、区切られた全体に焦点を当てて数えるものにあたる。さらに「タイプ2」は、個体が集まってまとまりを形成しているときに、敢えてまとまりの構成員に焦点を

当てて、その構成員の数を数える用法で、「タイプ3」は、個別性が高い物質を集めてまとまりを作り、そのまとまりに焦点を当てて数えるといった際に用いられるという。

伊藤（2004）は「タイプ2」にあたるものとして「粒」を挙げ、「タイプ3」にあたるものとして「組」をあげている。そして、このタイプ2と3の助数詞においては、数え手にまとまりを焦点とさせる「まとまり性」という特性が関与していることを指摘する。

「まとまり性」について、伊藤は「物理的には独立した存在であるが、心理的には同じ種類の他の個体と共にまとまりを構成していると認知されるものには、まとまり性という特性がある」（伊藤2004:81）と定義し、まとまり性を想起させる被修飾語（数えられる対象の名詞）の特性として、

- ・（液体、気体ではなくて）固体
- ・視覚的な基準、物理的な距離が近いもの。個体間の境界が明瞭なものよりは、不明瞭なもの。大きいものよりは小さいもの。
- ・計数、計量を行わなくても、日常的に複数で接する機会が多いもの。たとえば、何らかの部分から成り立っている個体物。複数個の個体と一緒にになって一つの役割を果たすもの（下線は筆者による）

という項目を立てている。手袋や布団が「組」を用いて数えられるのは、日常的に複数で接する機会の多いこれらの物が、まとまり性を持たせて捉えられているためであると考えられる。

7.2. 「まとまり性」からみる「セット」の特徴

伊藤（2004）の観点をを用いれば、助数詞「セット」は「組」と同様、「タイプ3」にあたると考えられる。それでは、おなじ「タイプ3」の助数詞として、「組」と「セット」はどのように異なるのだろうか。

「組」は、6節で述べた通り、「組み合わせて用いるもの」、つまり、「組み合わせた状態で日常的に接する機会が多いもの」を数える助数詞である。「組み合わせて使うという認識が一般的にないもの」を数える場合は、「4枚一組」や「2個一組」のように、あらかじめどのような個体の集まりであるのかを「枚」や「個」といった助数詞を用いて内訳を示す必要があった。まとまりの中で示される個体が、「同質のもの」である、つまり、「視覚的な基準が近いもの」である、という判断材料がない場合、「組」でまとまり性を付与することは難しいのではないかとと思われる。

一方、「セット」は、「太陽光発電システム」や「海水淡水化装置」といった具体的な形状が認識できないもの、「スミスバトラックス」のような商品名のための記載であっても、「セット」と数えることが可能であった。「セット」を用いる場合は、まとまりの中の構成員、すなわち被

修飾語がどのような集合を成すかはあまり問題にされないといえる。たとえば、「組」にはない「セット」の用法として、〈人間の動作〉を数える用法があるが、この場合、「セット」に修飾される対象は、「重心を右足に移し、左足を手でつかんで片足立ちする」、のような、連続した動作であった。「動作」はそもそも個体ではなく、大きさもはかることができない抽象的なものであり、一見、伊藤（2004）の挙げる条件の多くに当てはまらない。しかし、これらは、「筋肉トレーニング」や「ダイエット」といった一つの目的のために作られた動作の集まりで構成されており、「複数のものが一緒になって一つの役割を果たす」ものである。「セット」を使って数える側にとって、これらの一連の動きは、欠けると目標が達成できない「まとまり」なのである。たとえば（20）では、「セット」が修飾する語である「スクワット5回～10回」をきちんと行うことで、「弱った下半身を強化する」という目的に対し、「理想的」な効果が得られることが示される。

- （20）「弱った下半身を強化するには、ゴボウや山芋などの根菜類を食べると効果があります。ほかに、よく歩くこと、入浴前にスクワット運動を行うことなどもお勧めします」〈中略〉スクワットは、下肢・腰の筋肉強化に最適の運動だ。胸をなるべく前に押し出し、お尻は逆に後ろに突き出すようにするのがコツ。5回～10回が1セットで、これを1日5セットやるのが理想的。（一個人）

図1でいえば、タイプ3の中身（点線で示される○）となる、「セット」の修飾するものが「スクワット5回～10回」であり、それらを囲む枠線（楕円）は、「弱った下半身の強化に必要」という役割を示す。スクワット運動の目安として、5回～10回の動きを一つのまとまりとして「個別化」している、と考えられる。

こうした用法から見ると「セット」は、「修飾する語を役割により個別化する働きをもつ」助数詞なのではないかと考えられる。「セット」が「まとまり性」を名詞に付与するときに問題となるのは、個体それぞれの形状や性質ではなく、「その個体が集合することでどのような役割となるか」という観点なのである。だからこそ、一見まとまりがないように見える事物も、「セット」は数えることができるのである。数える側が「一つの役割をもつ」という認識をもてば、ひとまとめにして数えることができるといえる。

このように考えると、「組」と「セット」の違いは、まとまりの構成員が、「同質のもののみを許容するか」「異質なものであっても許容するか」にあると思われる。「組」は、「組み合わせる物」という認識がない事物に対しては、「一枚一組」「一個一組」のように、まとまりの構成員に同質性を要求する。一方で、「セット」は、まとまりの構成員の形状や同質性ではなく、「どのような目的を持つまとまりなのか」という役割に重点を置く助数詞であると思われる。異質なものであっても、目的が共通であれば、まとまり性を付与することができる助数詞といえ

よう。

ここまでのところから、助数詞「セット」は、『**目的に対して共通の役割をもつものを、ひとまとめにして数える助数詞**』であると定義できる。

そして、なぜ「セット」がこのような機能を持つのかといえば、「セット」という助数詞の元になる、名詞「セット」に関わる背景知識を話者が認識しているため、であるといえる。たとえば、「お出かけセット」という語について考えてみると、人それぞれ、思い浮かべるセットの内容は異なるにちがいない。試しにウェブ検索してみると、乳児との外出に必要なものであったり、カメラの収納ケース一式や、犬の散歩に必要なものをまとめたものであったりと、様々なものが「お出かけセット」と称されている。これらは、それぞれセットにしているものの内容は異なるものの、「お出かけに必要」なもの、という役割は共通している。このように、名詞「セット」にそもそも、「共通の役割により、ひとまとめにする」という性質があると考えられる。

3節で引用した『類語例解辞典』の記述において、「セット」は「きちんとできあがった組み合わせの時に、という使い分けがなされる」とあった。助数詞「セット」は、まとまりの構成員が同種かどうかは問わず、自由である。自由であることと、きちんとしていることは両立しないように思われるが、「まとまりの構成員が欠けてしまうと目的が果たせない」という点で、「セット」には、きちんとできあがった組み合わせが要求されるのではないかと思われる。つまり、「ある目的のために共通の役割をもつもの」が「きちんとそろっている」状態の時（つまり、セットになっている時）に、「セット」と数えることができる、と考えられるのである。

7.3. 「軍手1セット」と「軍手一組」から考える「セット」の機能

そして、ここで、6.4節で挙げた「軍手1セット」と「軍手一組」について改めて考えてみたい。宇都宮（2001）では、「物を数えるために助数詞を選択するとき、我々は数える対象の背景知識を想定するほか、助数詞そのものに関わる特定の背景知識も認識している」ことが指摘されている。「軍手」の背景知識としては、

- ・糸で編んだ手袋
- ・作業のために使う
- ・右手用・左手用の二つで一つの商品として成り立つ。

といったことが考えられるだろう。

次に、「組」と「セット」の背景知識であるが、組は「同種の品物によって組み合わせられた一つのまとまり」、セットは「いくつかの物が目的のためにそろってきちんとできあがった組み合わせ」になるといえるだろう。「軍手一組」は、「作業」という目的のための手袋が右手用と左手用で組み合わせさったもの、という認識になる。それに対して「軍手1セット」のすわりが

悪いのは、「セット」で数えることにより、「使用効果を考えた、一つの役割を持つまとまり」を意識し、軍手が軍手として機能するための最小単位（ここでは右手用と左手用の二つ）のほかに、何か別の目的をもったまとまりを想定してしまうからではないだろうか。「軍手セット」という名詞を仮に考えた場合、それは左右一对の軍手ではなく、複数の軍手が束になったものを想像すると思われる。こうした名詞のイメージを受けるために、「軍手1セット」と「軍手一組」には認識のズレが生じるのだと考えられる。

以上、まとめると、「セット」は「組」と同様、集合物を数える助数詞であるが、その集合を構成する個体同士が「役割」という抽象的な結びつきを持つために、個体の形状の大小や有無を問わず、「組」よりも自由な用法を獲得しているといえる。そして、このように、話者の目的によって、自由にまとまりを作ることができる特性があるために「セット」は助数詞として採り入れられたのではないかと予想できる。名詞型助数詞は、典型的な助数詞と異なり、数詞に名詞を直結して助数詞として用いることを特色とする。名詞を用いて対象を数えることにより、表現のバリエーションが生じ、さらに何を指し示しているのかが文脈の中で分かりやすくなるというメリットがあると考えられる。助数詞としての機能を獲得した名詞「セット」が、話者が「まとまり」として認識したいものを一つの集合物として数え上げることができることは、このような名詞型助数詞の特色とも矛盾しないだろう。

また、こうした特性をもつために、「セット」は名詞から、典型的な助数詞を補うものとして、(数を数えるために用いる) 準助数詞へと採り入れられたのであろうことが予想される。また、「セット」についていえば、two sets of ~のように、英語でも数を数える場面で使用されることから、元々助数詞として使われやすかったことが考えられる。

「数詞+名詞」の組み合わせには、「3 容疑者」のように、容疑者を数えるための助数詞としては用いることができない、その場限りの表現となる「擬似助数詞」と、このように、数を数えるために用いられる「準助数詞」があるが、「セット」の例を見ると、必ずしも、名詞→擬似助数詞→準助数詞という順序を経る必要がないということがいえるだろう。この点については、今後他の準助数詞についても個別の用法を確認する中で、より深く分析を行っていきたい。

8. おわりに

本稿では、名詞型助数詞「セット」と「組」について、複数の資料から得た用例により比較し、「セット」が「役割」という抽象的なまとまりによって個体同士を結びつけるために、「組」に比べて柔軟な用法を持つこと、こうした用法を獲得しているのは、名詞「セット」の語の意味によるものであることを述べた。名詞型助数詞「セット」は、数詞と切り離して単独で名詞

として用いられることから、典型的な助数詞とは異なるものであるが、名詞由来であるからこそ、独自の用法を獲得し、その利便性により典型的な助数詞の数えられなかった範囲を補うものであると考えられる。

そして、こうした特性を持つ名詞が、どのような過程を経て名詞型助数詞になったか、については、経年的な調査が必要になると思われる。とくに、外来語である「セット」は、比較的近年増加してきた助数詞であると考えられる。試みに、国立国語研究所「雑誌九十種の語彙調査」（1956年調査実施）の用例カード¹⁰⁾で「セット」の用例を参照したところ、最も多かったのは撮影等で用いる映画のセットの例（8例）であり、「紅茶セット」「ウイスキーセット」などといった名詞の用法は見られたものの、助数詞としての「セット」は1例も見られなかった。用例数が少ないため確かなことはいえないが、1956年段階では、まだ助数詞としての用法が一般的でない可能性が考えられる。また、少し時代が下った1977年には『青少年白書』にて「3万セット」という例も見られ、かなり大きな数と共に用いられていることから、擬似助数詞を経ずに準助数詞として採り入れられたことが伺える。このため、20世紀後半という限られた範囲であっても、様々な資料にあたり、経年的な調査を行うことで、「名詞」が「名詞型助数詞」になる過程を追うことがある程度可能であると考えられる。この点については、年代ごとに行きだけ広範な用例を収集し、通時的变化を観察する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

- 1) 成田（1990）の用語では「名詞と同形の助数詞」。
- 2) 本稿での「修飾」は、「助数詞が名詞の数を指し示すこと」を表す。
- 3) 本データは一般公開していないが、国立国語研究所より使用許可を受けて利用したものである。
- 4) 本稿で用いた『CD- 毎日新聞データ集』は、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾・賞書に基づき使用したものである。
- 5) 国立国語研究所（2005）によれば、出現形「セット」の全体度数は、英語表記などを含め356とあるが、これは標本調査の範囲内での結果である。本稿では、当該資料において、標本調査の対象外の範囲についても検索対象としているため、多少誤差が生じている。これはセット以外の調査項目についても同様である。
- 6) 用例出典は、雑誌資料・書籍の場合はタイトルを、新聞の場合は日付と紙面を示した。また、用例内の数字表記は用例のまま示し、算用数字・漢数字に統一することはしていない。
- 7) 雑誌、書籍、新聞のほかに「知恵袋」で1例（折り紙）、「広報誌」で1例（和歌）の用例があったが、いずれも1例ずつのため、表9の「単独でも使用可のもの」の集計と、総計に加えるのみとした。
- 8) 水口（2004）の用語では、「類別詞」としている。以降、本稿では用語の引用以外では類別詞と助数詞を区別せず、「助数詞」として統一して記述した。
- 9) 伊藤（2004）の用語では「類別詞」としている。注8同様、本稿では「助数詞」として統一して記述する。
- 10) 本資料は一般公開していないが、国立国語研究所より使用許可を受けて利用したものである。

参考文献

- 飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院文学研究科博士論文。
- 石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版。
- 伊藤紀子（2004）「形状類別詞「粒」の用法とまとまり性」西光義弘,水口志乃扶編『シリーズ言語対照 第3巻 類別詞の対照』くろしお出版。
- 宇都宮弘章（2001）『数えることば—数えることをめぐる認識と日本語—』日本図書刊行会。
- 影山太郎編（2011）『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店。
- 見坊豪紀（1965）「現代の助数詞」『言語生活』166 筑摩書房。
- 小出慶一（2003）「助数詞「本」の用法の拡張について—なぜ「仕事」は「本」で数えられるか—」群馬県立女子大学紀要24。
- 国立国語研究所（1962）『現代雑誌九十種の用語用字 第一分冊—総記及び語彙表—』秀英出版。
- 国立国語研究所（1970）『電子計算機による新聞の語彙調査』国立国語研究所報告37 秀英出版。
- 国立国語研究所（2004）『分類語彙表—増補改訂版』大日本図書。
- 国立国語研究所（2005）『現代雑誌の語彙調査—1994年発行70誌—』国立国語研究所報告121 秀英出版。
- 鈴木一彦,林巨樹（1973）『品詞別 日本文法講座 品詞論の周辺』明治書院。
- 田中佑（2012）「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」『筑波応用言語学研究』19。
- 田中佑（2014）「助数詞「一店」の現代語における意味—その成立過程および類義助数詞「一店舗」との比較から—」『語彙研究』11。
- 東条佳奈（2014）「名詞型助数詞の類型—助数詞・準助数詞・擬似助数詞—」『日本語の研究』第10巻4号。
- 成田徹男（1990）「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27。
- 松本 曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系—原型意味論による分析—」『言語研究』99。
- 水口志乃扶（2004a）「類別詞とは何か」西光義弘,水口志乃扶編『シリーズ言語対照 第3巻 類別詞の対照』くろしお出版。
- 水口志乃扶（2004b）「日本語の類別詞の特性」西光義弘,水口志乃扶編『シリーズ言語対照 第3巻 類別詞の対照』くろしお出版。
- 水口志乃扶（2009）「類別詞から日本語を考える」『日本語学』28巻7号。

辞典類

- あらかわそおべえ（1977）『角川外来語辞典』第二版 角川書店。
- 石綿敏雄（1990）『基本外来語辞典』東京堂出版。
- 大野晋・浜西正人（1981）『角川類語新辞典』角川書店。
- 金田一京助（他）編（2011）『新選国語辞典』第九版 小学館。
- 小学館国語辞典編集部（2006）『精選版日本国語大辞典』小学館。
- 小学館辞典編集部（2003）『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』小学館。
- プレム・モトワニ（1991）『日常外来語用法辞典』丸善。
- 松井栄一（2005）『小学館日本語新辞典』小学館。

用例出典

- 国立国語研究所『月刊雑誌70誌の語彙調査』原文データ。

国立国語研究所『雑誌九十種の語彙調査』用例カード.

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』.

『CD-毎日新聞'94データ集』.

(博士後期課程学生)

(2014年8月21日受付)

(2014年10月7日修正版受付)

(2014年10月28日掲載決定)